

皇居前「国家の品格」

建築家 竹内 壽一

●首都東京の要であり江戸文化を引き継ぐ国家財産・皇居の周辺は、ニューヨーク摩天楼のような「丸の内マンハッタン計画」により、超高層ビル化が進んでいます。

●現在では皇居から徐々に百〜二百mの「すり鉢状」高さ規制となっています。この第一番の問題は、皇居に最も近いパレスホテルの高さ百mへの建替計画が象徴的に示しています。皇居が丸見えになるので宮内庁からも要望が出ました。ホテル側は建築確認

が間近なためにルーバーによる目隠しという苦肉の策で対応していますが、すればするほど高さに加えて都市美観を損なう醜悪なデザインになっていきます。



→ 丸の内マンハッタン計画 一九八八

●丸の内の高層ビル化を可能にしているのは、高さ二百mほどの超高層を建てられる千三百%もの高い容積率です。他にも都心部には緑溢れる神社の隣に超高層という奇妙な「セット景観」が目立ちます。隣接地の余った容積を移転して自らの敷地に上乗せできるからです。

●経済最優先や過度の規制緩和が今日の都市景観を醜悪化していそうです。日本の建築界は本当にこれで良いのか。皇居周辺の都市景観への関心を喚起したいと、筆者も含め（心ある）建築家や都市計画家、弁護士、市民団体が美観論争を起こしています。二百mに建替計画の中名建築・中

→ 皇居より超高層ビル群を望む



中央郵便局を重要文化財にする
保存運動も展開中です。

● 都市景観は道路から見える
「建築の立面やお化粧術」では
ありません。場所にふさわ
しい美しい環境を創るための
「時間的・空間的共有表現」
です。しかし、丸の内には人
が住まず、生活に直接関わる
人たちの意見もなく、企業本
位です。「皇居」という住まい
に隣接する業務地域で高層建
築が衝立のように乱立すると
「国家の品格」に関わります。
どこの国でも王宮周辺は控え
目な都市景観です。

● 皇居の中に見られる日本の
伝統的な建築は、石垣、瓦や
漆喰壁など、モノクロームで
す。光が当たってもキラキラ



反射しないし、眩しくない。
基本的に無彩色の伝統的建築
素材が地面の土と周辺の緑で
彩られている。それが日本の
風土の中で季節感を表わし、
都市景観を「中間色」化させ
てきたと思います。丸の内の

ビル群は総じてガラスと冷たい金属製で、唯一東京海上ビルだけが東京駅の赤煉瓦に配慮した温かみのあるタイルで出来ている。この茶色は土を連想させて違和感がなく、許容範囲内にあると思います。

●美に造詣の深い石原都知事は、・・・「愛宕山の山頂から撮った幕末江戸の写真には、手前に大名屋敷の白い塀、遠くに築地本願寺や芝増上寺が望まれる。浜離宮の森が茂り、江戸前の海が輝いて見える。ほとんどの建物は2階建て、屋根はみな濃い灰色の瓦、壁は白。パノラマの光景は息をのむほどしつとりと美しい。しかし今の東京は醜悪としか言いようがない。」・・・



→ 皇居内の視察・弁護士と建築家

●「巨大な空虚」 皇居と丸の内とはお濠を間合いとする「ハレとケ」の対極にあり、ハレを「沈黙Ⅱ文化」、ケを「喧噪Ⅱ文明」の場所と見做せません。丸の内には、高さは勿論、

形や素材を吟味した文化的な香りのする超高層も可能ではないか。例えば、耐火性や防腐蚀性などを備えた「木造の超高層」もその一つでしょう。日本には法隆寺をはじめ五重の塔もあるし、古代の出雲大社は高さ五十mほどの巨大建築だったと言われています。

●私は、実現可能な究極の「建築像」や「夢」を建築界あげてもっと積極的に語ろうと思います。そしてその成果として、「合理性」よりも「情緒」や「型」を重んじた日本独自の「品格ある都市文化」を世界に示したいものです。

(株)竹内建築総合研究所 主宰
(社)日本建築家協会 元理事